

在城の時、其の徒の賦魁共の墳ならんが、彼の徒驕奢を以て巨大に築きたるか。何れにも是らあばき見たき者也。といへり。櫻井朝香曰く、上野の村地より牛坂の村地へかけて、往古は埋葬の地なりけん。古墳影敷散在す。殊に皆大なる塚共にて、上代高貴の墳墓なりしと覺ゆ。上野八幡の社地も古墳の域にてありしを、追々崩し平地となしたり。是に並びてまた大塚あり。思ふに夫婦の墳墓なりし故に、並べ築きたるものならんか。社地と成りし塚は幸に社を置き、八幡宮を祀りける故、境域も削らず、于今堀跡まで残り。又其の並びなる塚も昔は堀形有りて、石の柵なども僅に残れり。元より古木生ひ茂り居たるよしなれど、稻干場と成りたる故に、今はさるものもなく、古木さへ近く伐り取り、境域も追々減ぜり。此の外此の地邊には墳墓なりといひ傳ふる塚、所々にありといへり。然るに明治廢藩後、右古墳共の古木共を邑民悉く伐り取り、殊に練兵場出來の頃、彼の地域なる墳墓共は皆取り毀ち、今残れるものは、僅に上野八幡の社前なる墳墓と、牛坂の傍なる茶釜山と俗稱せる墳墓のみと成りたりといへり。平次思ふに、

いにしへの墳墓は世を経るに従ひ、追々開墾等の爲に廢毀せられけるなるべし。徒然草にも人のなきあつばかりかなしきはなし。さるは跡とふわざも絶えぬれば、何れの人名をだに知られず。松も千年をまたで、たぎぎにくだかれ、ふるき塚はすかれて田となりぬ。そのかたぎになく成りぬるぞかなしき。と書き置けるは、信にさる事にぞ覺えける。文選の古詩にも、古墓塋爲田。松柏摧爲薪。とあるをもて、兼好法師が書き載せたる文なるべけれど、支那も日本も同じ習俗といふべし。

○牛坂

練兵場の前通りより若松の方への坂路なり。三州志來因概覽附録に云ふ。一説に、小立野は山崎庄にある野なり。古此の所曠野にて、田井郷の農父牧童の牛馬の秣刈場なり。今云ふ、馬坂は、そのかみ此の坂路より馬多く牽きのぼる岨坂なるにより、馬坂と名付けたりと云へり。是を以て推し見れば、牛坂も此の義にてかく遺名あるならんと。

○牛坂古傳話

燕臺風雅卷四脇田直賢傳に云ふ。直賢通名九兵衛、本姓金

韓人也。文祿元年朝鮮之役、浮田中納言秀家將大軍至釜山浦。直賢父翰林學士金時省、防戰爲國死。時直賢僅七歲、爲秀家所擄而來備前岡山。明年癸巳秀家夫人憐其孤弱、以有通家之誼。送芳春夫人於金澤。夫人憫其險覺愍凶。躬親撫育。於是瑞龍公年俸賜百斛。爲近侍童。及長使脇田姓冒之。相傳。直賢每遊小龍臺牛阪上。目送自稚松山下晁水流尾西走。以彷彿故國地景。垂思鄉淚云々。按ずるに、小龍臺は小立野臺にて、牛坂上は牛坂の坂上より向ひを眺望するをいへり。稚松山は若松山なり。晁水流尾は銚子口村の邊をいへり。脇田直賢が此の地邊を眺望して落涙せし傳説は、青地禮幹の可觀小説に載せたり。直賢が傳は小姓町の條に詳細に載す。

○牛坂藥師堂

馬淵高定の武家混目集に云ふ。當國牛坂の藥師堂は、源牛若十四歳の時御參詣祈誓ありし處なりと、里俗の口に云ひ傳へたり。牛若は承安四年鞍馬を出でられし時十六歳なり。然れば十七歳を十四歳といひ誤りたるか。牛若の潜行は其いはれ有る事なりと云ふ。と載せたり。按ずるに、混

見摘寫に、加州熊坂太郎長範といふは、藤原氏にて武勇の者なり。後盜賊と成り、承安中牛若が爲に討たると見ゆ、堀袴庵の越白浪に、熊坂長範は加賀國江沼郡に熊坂七郷というて、石坂・吸坂等の七坂の名あり。石坂に屈曲の瀑布あり。此の所熊坂長範を産せし所なりといひ傳へたり。或説に、熊坂の長範は保元・平治の間、世に横行して賊首となり、六十三にして牛若の爲に青野が原の露と消えぬといへりと。又義經興廢記といへるものには、牛若奥州下りの時、近江國鏡の宿にて越前の藤澤入道といへる強盜を亡されたるよし記載す。されば越前・加賀には牛若の古蹟多かりしかど、牛若と稱せし若年の頃鞍馬山より北國へ下られし事は、如何なる由縁なるかいままだ詳かならず。加賀國安宅關通行の俗談をはじめ、加賀・能登・越中に義經の事蹟をいひ傳ふるものは、義經記に載せたる奥州下りの時にて、文治年中の事なり。